

クローズアップ

NGO・NPO

Close Up

NGO・NPO

日本語の輪を広げる会 福井の日本語支援活動20年

設立の経緯

「日本語の輪を広げる会」は一九八五年七月に設立され、来年二〇周年を迎えようとしている。当時福井に住んでいる外国人が、隣の石川県金沢市まで日本語を習いに行くと知った前会長をはじめとする設立メンバーが、福井にも外国人に日本語を教える会をつくろうと立ち上げた。そして福井での生活がより楽しく有意義なものになるよう、日本語習得の援助を通じて輪をつくり広げようとの思いから「日本語の輪を広げる会」と名付けた。

会の概要

現在の会員数は五五名(平成一六年三月現在)、設立時からのメンバーも五〜六名あり、一五年以上という会員も含めると一〇名を越す。一方で、昨年、一昨年入会の会員もいて、昨年大学四年生で入会した会員から七〇代の会員まで、幅広いメンバーが活動している。

活動の主な場所は、福井県国際交流会館である。ここは福井市の中心部にあり、一九九五年に建てられた明るく広々とした、居心地の良い建物である。一九九五年以前には、別のビルに国際交流協会が入っていて、その会議室を区切って使ったり、公民館や貸室を借りて活動を続けてきた。現在の国際交流会館には、二階に小さな部屋が五つ用意されており、語学研修室として、日本語のプライベートレッスンや、小グループの授業に借りることができる。おかげで、一週間に八〇〜九〇

の授業を快適な環境下で実施している。

活動の内容

二〇〇三年度は二〇カ国、一八〇人の学習申し込みがあった。日本語を習いたい外国人は国際交流協会に相談に訪れる。県下には一三の日本語支援ボランティアグループがあり、福井市にそのうち四つがあるが、当会以外は会員数名と小規模であり、当会がそのほとんどの受け皿としての役目を果たしている。

学習者の背景は、企業研修生、留学生、日本人との結婚で来日した人、A L Tや、語学学校の先生、その他の労働者や日系人などで



↑「生活基礎会話クラス」の学習者と担当者



↑プライベートの授業風景

ある。学習目的も初級から上級まで、日常会話、漢字や書くことを中心に、日本語能力試験を受けたい、高いレベルの日本語会話を、などさまざまである。

しかし、一番切実だと感じるのは、全く日本語が話せずに日本人との結婚のために来日し家族とのコミュニケーションが十分できず困っている人、日本語が話せないので職に就けない人、またここ数年増えてきた就学児の申し込みである。学校に適應できずに家で過ごして、週一回の日本語の授業を楽しみにやってくるという子どももいる。

夜の常設のクラスにいたある女性は、中国から日本人との結婚で来日したのだが、クラスでの授業には熱心でなく、雑誌を見ていた

り、休憩の後しばらく戻ってこないこともあった。送り迎えをするご主人に対しても笑顔を向けることがなかった。常設講座終了後プライベートの授業を希望し、会員の一人が受け持った。やがて赤ちゃんが生まれ、その子を抱いて国際交流会館に来た彼女に私は偶然会った。すっかり優しいお母さんの顔になった幸せそうなその人と話し、驚くと同時に日本語支援にかかわっている幸せを私も感じた。

個々の学習申し込みへのプライベートを中心とした授業のほかに、県や国際交流協会から事業委託を受けた日本語講座がある。毎年、春には南米ブラジルやアルゼンチンから、秋には中国浙江省からの企業研修員が、それぞれ五〜十名、約一年間の予定で来福する。それぞれの研修に就く前の二日間、八〇時間の日本語研修を当会が行っている。南米からの研修員は日系の主に福井県ゆかりの青年、中国浙江省杭州市は福井市との友好都市になっている。講座の担当者たちは毎年、今年の研修生の顔ぶれは、そして日本語力とはと準備を重ね来日するのを待つ。

また、国際交流協会主催の日本語常設講座という二〇人程度のクラス授業を毎年行っている。春秋冬の三期、週に一回二時間、火曜日または木曜日の夜に行い、一回または一回で二コースである。数年前までは初級一から初級四まで年間九クラスあって初級レベルをほぼカバーすることができたが、現在は初級一と、初級二、それと生活基礎会話クラ

スで年間五クラス行っている。

今年度の新たな取組みとしては、国際交流協会との連携で行う日本語教材作成がある。福井県の情報や地域文化を盛り込んだ初級の会話教材を作ろうという計画で、来年三月には、カラーページも入れた一〇〇ページ程度の、英中二カ国語の訳がついたテキストができる予定である。

問題点と今後の課題

先に記したように、日本語の輪を広げる会は二〇年目を迎える。設立当初ゼロから皆がスタートし、勉強し模索し合って、会の運営のための組織体制も整えてきた。しかし、勤めを持つ会員の増加などにより、運営にかかわることのできる会員の偏りや、長年活動している会員と比較的新しい会員との考え方のギャップが現れてきた。また学習者の多様化に伴う対応の難しさもある。

二〇〇一年に福井県の日本語支援ボランティアネットワーク会議が発足し、県下のボランティア団体の情報交換や意見交換を通じたネットワークができてきた。情報化時代、われわれの価値観は多様化し、しかしながら、日本語支援を必要とする人は増えており、混沌とした社会を迎えている。

このような情勢の中、柔軟な意識とボランティアを始めたときの新鮮な情熱を持って、会員同士も、ほかの会の人、また行政等とも手を携えて日本語支援を続けていきたいものである。

クローズアップ

NGO・NPO

Close Up

NGO・NPO

近江渡来人倶楽部

次世代の日本を心豊かで実り多いものに
～内なる国際化と多文化共生を目指して～

設立のきっかけ

日本の植民地支配によって発生した在日コリアンは、特別永住許可によって日本社会に根を張って暮らしている。そして、既に第一世代から第二世代へと主導的立場が継承され、まもなく第三世代への引継ぎを考えるべき時期となりつつある。

また、若い世代の大多数は、日常生活において民族的偏見や差別を感じる事が少ないため、自らも日本社会の一員であるとの認識がほとんどである。例えば、結婚相手も対日本人が八五%を超え、帰化者も年間一人を数え、ますますこれらの傾向に拍車がかかっている。

しかしながら、第二世代の在日コリアンの多数は、こうした時代背景を理解・認識しようとせず、日本での永住を決意しながらも、依然として過去の被害者意識に支配されたまま、自己の経済的利益や民族的郷愁を優先しながら暮らしているのが現状である。

他方、日本社会では在日コリアンの歴史的経緯についての知識が極端に不足しているため、彼らの存在に対する認識が希薄であるとともに、無知による誤解が潜在化しており、真の交流の阻害要因となっている。

このような不健全な状態を改善するためには、在日コリアンが積極的に社会参加し、地域社会への貢献を通して存在をアピールすることが必要である。同時に、日本人との協働の過程で相互理解を深めながら、パートナー

としての信頼関係を構築すべきである、との結論に達した。

そこで、まずは渡来人との関係が特に深く、歴史的遺産の多い近江から産声を上げ、具体的な行動を起こすことにより全国のモデルケースになるべきであると考え、二〇〇〇年四月一日に「近江渡来人倶楽部」を設立。代表幹事である河柄俊のもと、事務局二名と正会員約七〇名のほか、賛助会員約二〇名が当倶楽部を支えている。

活動の目的

二一世紀の日本社会は「生産年齢人口」が急激に減少し、労働力については外国人に頼らざるを得ない時代を迎えるであろう。現在、日本全国の外国人登録者数は一八〇万人を超え、一五年前の約二倍に増えている。滋賀県においても外国籍住民の増加は顕著であり、今日では約二万五〇〇〇人を数え総人口の二%に達する勢いである。しかも、ブラジルやペルーの日系人が半数を占めており、民族的少数者の絶対数を占めていた在日韓国・朝鮮人は二五%に満たない。

このように、日本社会は経験したことのない「多民族多文化社会」への移行を確実視されているが、言語や文化や生活習慣の異なる外国人との日常的な共存生活についてはほとんど経験がない。そのため、外国人を異質な存在とみなす傾向が強く、排他的でさえある。

そこで、民族的少数者の先輩である在日コリアンと日本人の双方が、過去のかたくな

近江渡来人倶楽部

〒520-0022 滋賀県大津市柳が崎5-25 TEL 077-526-2929 FAX 077-525-5300
E-mail:tryjng@hkg.odn.ne.jp URL:http://www.tryjng.com.

姿勢を取り除き、心豊かな「多文化共生社会」の構築に向かって、日本社会の意識改革に取り組みねばと考へた。

①近代の渡来人である、在日韓国・朝鮮人(在日コリアン)への「根拠のない民族的偏見や差別」を解消することによって、彼らがルーツを隠すことなく堂々と暮らすことができる「自由で公正な開かれた社会」の実現を促進する。

②現代の渡来人である、アジア系やラテン系をはじめとする外国籍住民への「排他的な対応」を改善することによって、彼らが日本社会の一員として心豊かに暮らすことができる「包容力と多様性を持った多文化共生社会」の実現を促進する。

③世界平和を標ぼうし、国際社会のリーダーたらしめとする「21世紀の日本が、世界から信頼され尊敬を集めることができるよう、日本社会の「国際感覚と人権意識」の向上を目指す。

活動内容

当倶楽部は、これらの目的を達成するために、次に掲げるような事業を展開している。
①日本と朝鮮半島との関係について、客観的で正確な歴史認識の普及を促進する事業。
②定住外国人の人権を尊重するとともに、相

互理解を促進する事業。

そして、具体的には以下のような取り組みを実践している。

①講演会の開催や講師派遣による啓発活動



↑「人口減少社会の経済と外国人政策」パネルディスカッション (2001年4月30日)



↑「アジア文化の源流を訪ねて」弾き比べ演奏会 (2001年4月21日)

②ヒューマンフォーラム21の開催

【第一回】「人口減少社会の経済と外国人政策」と題するシンポジウム。

【第二回】「21世紀の日本社会内なる国際化と多文化共生」と題するシンポジウムと、「アジア文化の源流を訪ねて」をタイトルにアジア三カ国の琴の競演。

【第三回】「渡来文化と近江への道」と題して日本人のルーツについて、全国の研究者による発表と意見交換。

【第四回】「多文化共生時代の日本社会と在日コリアン」と題して、講演会とシンポジウムとひとり芝居を開催。

③おうち多文化交流フェスティバルの開催
現在、第一回を企画中であるが、その趣旨は以下に示すものである。

- ・世界各国の文化・芸術に接する。
- ・外国籍住民の本国の生活文化(習慣・食べ物・遊び等)を体験する。
- ・外国籍住民の暮らし(生活)の現状を紹介する。

今後の活動

対外的な活動については充実してきたが、いま一度原点に立ち返り、会員中心の活動を活性化させる必要に駆られている。そのため、勉強会(ビデオ上映会や会員討論会)などを通して人材を育成するとともに、渡来人歴史資料館や外国籍住民サポートセンターの開設を通して、具体的活動を推進する予定である。